大山隠岐国立公園指定 90 周年記念フォーラム

神話と山岳信仰が息づく山・島・海の魅力向上

～100 周年、そしてその先への挑戦～

記録誌

開催日：２０２６年２月２８日（土）

会場：さなめホール（米子市淀江文化センター）

主催：環境省中国四国地方環境事務所

共催：鳥取県・島根県・岡山県

１．開催趣旨/プログラム

＜開催趣旨＞

本フォーラムは、大山隠岐国立公園の指定 90 周年を契機に、国立公園の現場でチャレンジし続けている関係者の連携強化や知見・経験の共有を図るとともに、その取り組みを多くの方に知っていただくことにより、100 周年に向けて大山隠岐国立公園ならではの魅力を見つめなおし、活かしていくための展望を開くことを目的とする。

二部構成としており、講演会やトークセッション、意見交換会を通じて、多様な地域関係者による地域の魅力や今後の挑戦について伺い、次の 10 年、その先の未来に向けた大山隠岐国立公園と地域の姿について考える場となることを目指して開催した。

＜開催概要＞

・名称：大山隠岐国立公園指定 90 周年記念フォーラム
神話と山岳信仰が息づく山・島・海の魅力向上
～100 周年、そしてその先への挑戦～

・開催日時：令和８年２月２８日（土）１３：００～１７：００
（１２：００～開場）

・会場：さなめホール（米子市淀江文化ホール）
鳥取県米子市淀江町西原 708－4（淀江支所隣り）

・定員：250 名

・開催形式：対面参加およびオンライン配信（Youtube Live）視聴参加

・参加費：無料

・主催：環境省中国四国地方環境事務所

・共催：鳥取県・島根県・岡山県

＜プログラム＞

〇第１部（１３：００～１５：４５）　さなめホールにて

・オープニング動画

・主催者挨拶：環境省中国四国地方環境事務所所長　坂口　芳輝

・共催者挨拶：鳥取県生活環境部部長　中村　吉孝氏
島根県環境生活部部長　美濃　　亮氏
岡山県環境文化部部長　國重　良樹氏

・祝辞披露

・90 周年ロゴ紹介：イラストレーター　朝倉弘平氏

・講演「民間事業者と連携した自然再生と地域の経済・文化・伝承～大山隠岐国立公園の１００年に向けて～」
講師：蒜山自然再生協議会　事務局　千布　拓生氏

・トークセッション「これまでとこれから～大山隠岐国立公園 100 周年、そしてその先に向けた挑戦～」

【コーディネーター】　（公財）とっとりコンベンションビューロー 理事長　石村隆男氏

【地域関係者①】 角磐山 大山寺 金剛院 看坊　清水　豪九氏

【地域関係者②】 株式会社さんべ開発公社 企画営業部長・さんべツアーズ事業部長　長尾純氏

【地域関係者③】 （一社）隠岐ジオパーク推進機構　生物研究員　立花 寛奈氏

【コメント①】 蒜山自然再生協議会　事務局　千布　拓生氏

【コメント②】 環境省大山隠岐国立公園管理事務所　所長　蔵本　洋介

○第２部（１６：００～１７：００）　イベントホールにて

国立公園関係市町村及び満喫プロジェクト構成員等の関係者による意見交換会

○パネル展示（１２：００～１７：００）　ホワイエにて

①蒜山自然再生協議会

②大山町商工観光課

③独立行政法人 造幣局

④大山いきもの部 白石泰志氏

⑤鳥取県立大山自然歴史館

⑥環境省

以上、６ブース出展。

○新庄村　餅つきパフォーマンス（１２：００、１２：３０）　さなめホール会場入り口にて

岡山県真庭郡新庄村役場による餅つきパフォーマンスと来場者への餅の振る舞い

2．新庄村　餅つきパフォーマンス

岡山県真庭郡新庄村役場 5 名による餅つきパフォーマンスが、さなめホール会場入り口にて行われた。特産のもち米「ヒメノモチ」を使い、打ち水を入れず、4 名が早いテンポで餅をつく。1 名が餅つきパフォーマンスの特徴を解説。

蒸しあがった餅米を杵に入れて突き上がるまでが、およそ 10 分程度。1 回目が 12 時頃、2 回目が 12 時半頃から開始された。ついた餅は丸い小餅にし、きな粉をまぶして来場者に振舞った。

「ヒメノモチ」は、大山隠岐国立公園に編入された「毛無山」の清流と寒暖差の激しい気候の中育ち、白さと粘り、なめらかさが特徴。

３． 千布拓生氏　講演内容（概要）と資料

演題：「民間事業者と連携した自然再生と地域の経済・文化・伝承～大山隠岐国立公園の１００年に向けて～」

講師：蒜山自然再生協議会事務局　千布拓生氏

講演に先立ち、大山隠岐国立公園が 90 周年を迎えたことに対し、これまで地域で活動を続けてこられた住民の方々や自治体、環境省、研究者など多くの関係者の努力に敬意を表したい。2007 年から 2013 年まで鳥取大学の学生として江府町の鏡ヶ成や鍵掛峠周辺で国立公園の生物や制度について研究しており、その経験が現在の活動の原点となっている。2021 年に蒜山へ移住し、同年に設立された蒜山自然再生協議会に関わりながら活動している。本日は協議会の概要と取組、特に「恵みの再生」として力を入れて進めている茅の利活用を中心に紹介し、100 周年を見据えてお話しする。

蒜山は大山の火山活動によって形成された黒ボク土の大地で、土壌は酸性が強く、米づくりには適さない環境だった。そこで地域の人々は草原の草を刈り取り、田んぼの土と混ぜることで緑肥や土壌改良剤として活用するという知恵を生み出した。そのため、蒜山では少なくとも 700~800 年ほど前から、春の山焼きや夏の草刈りを通じて草原を人の手で維持してきた。草原は農業の資源としてだけでなく、オミナエシやキキョウなどの草花が咲く景観や、草原に依存する多くの生物を育む重要な自然環境でもあった。

しかし近年は生活様式の変化により、農業資材などを外部から購入できるようになったことなどから草原管理の必要性が低下し、草原は急速に減少している。樹林化が進んだことで、草原に依存する生物が絶滅の危機にあるほか、山焼きなどの伝統文化や国立公園を特徴づける草原景観の雄大さが減少しているといった課題が生じてる。こうした状況は地域のアイデンティティの喪失にもつながる問題だと考えている。

こうした背景のもと、蒜山自然再生協議会は 2022 年に自然再生推進法に基づき設立された。真庭市が主導し、全国で 27 番目の自然再生協議会として発足した比較的新しい組織である。現在は蒜山高原の「シェアオフィス蒜山ひととき」に現地事務所を置き、自然再生活動委員会、自然資源利活用活動委員会、広報啓発活動委員会の三つの委員会に基づいた活動を進めている。

主な取組としては、鳩ヶ原草原や周辺湿原をフィールドとした草原再生や湿原再生、登山道整備などがある。鳩ヶ原では毎年山焼きを実施し、ボランティアによる草刈りなどを通じて草原の維持に取り組んでいる。また湿原では、水路の改善や樹木の伐採などにより湿原環境の再生を進めている。こうした取組が評価され、鳩ヶ原草原と周辺湿原の約 62 ヘクタールが環境省の「自然共生サイト」に認証された。

近年特に力を入れているのが、草原資源である茅の利活用だ。蒜山ではかつて茅葺き屋根や雪囲いなどに利用さ

れていたが、一度は利用が途絶えた。そこで真庭市や地域の農家、茅葺き職人などと連携し、2020 年に茅刈出荷組合が本格的に稼働を始めた。組合員である地元の農家の方々が農閑期に茅を収穫し、組合が買い取る仕組みができている。収穫量は年々増加しており、草原管理と地域の副収入の両面で効果が生まれている。

また、茅の新たな用途の開発や普及にも取り組んでいる。観光拠点施設「GREENable HIRUZEN」との連携による体験プログラムや展示、企業との協働による建材利用の研究など、多様な主体と連携した活動が広がっている。蒜山産の茅は大阪・関西万博のパビリオンにも使用され、これを契機に万博会場でイベントを開催したところ、約 1 万 2 千人が来場し、草原文化の魅力を広く発信する機会となった。

こうした取組を進める中で感じているのは、自然再生は地域社会の再生にもつながる可能性があるということだ。中山間地域では人口減少や担い手不足など多くの課題があるが、自然資源を活かした活動が新しい仕事や産業につながれば、地域の魅力を高めることにもつながる。

今後は、茅の生産拡大やエコツーリズムなどを通じて、自然再生そのものを持続可能な仕事として成立させていくことが重要だと考えている。こうした取組を積み重ね、次の 100 周年を迎える頃には、自然再生が地域の産業や職業として根付いている姿を目指して活動を続けていきたい。

４．トークセッション内容と各登壇者資料と紹介内容

登壇者は以下 6 名

【コーディネーター】（公財）とっとりコンベンションビューロー 理事長　石村隆男氏

【地域関係者①】角磐山 大山寺 金剛院 看坊　清水　豪九氏

【地域関係者②】株式会社さんべ開発公社 企画営業部長・さんべツアーズ事業部長　長尾純氏

【地域関係者③】（一社）隠岐ジオパーク推進機構　生物研究員　立花 寛奈氏

【コメント①】蒜山自然再生協議会　事務局　千布　拓生氏

【コメント②】環境省大山隠岐国立公園管理事務所　所長　蔵本　洋介

トークセッション

1． コーディネーター：石村隆男（（公財）とっとりコンベンションビューロー理事長）

大山隠岐国立公園指定 90 周年という節目に立ち会えることを喜ばしく思う。これまで約 30 年にわたり、大山を中心とした地域の観光振興に関わり、「大山ファンクラブ・大山王国」「エコツーリズム国際大会」「大山開山 1300 年祭」などの取り組みに携わってきた。

大山を中心とした広い地域が古くから一つの文化圏を形成してきたことを強調したい。中海・宍道湖地域、隠岐諸島、鳥取県全域、さらには蒜山を含む岡山県北部や広島県の一部まで、この地域は古来より大山をランドマークとして仰ぎながら暮らしを営んできた。神話の時代から続くこの地域は、日本という国の成り立ちの原点ともいえる場所である。

大山は単なる地理的な目印ではなく、人々の精神的な拠り所でもある。日常の中では意識することが少なくても、ふと大山を眺めたときに背筋が伸びるような感覚を覚える。そうした存在として、大山は人々の心の中に「マインドマーク」として存在している。

現在、この地域は国の「国立公園満喫プロジェクト」に選定され、新たな観光振興の機会を得ている。90 周年という節目は、これまでの歴史を振り返ると同時に、100 周年に向けて新たな挑戦を始めるタイミングでもある。今回のセッションでは、異なる立場から地域に関わる 3 人の若い実践者を招き、地域の未来を考える機会としたい。

会場に展示された大山を中心とした広域の地図で示されているように、この地域の広がりを視覚的に伝えることが重要。駅や空港、港などの玄関口でこうした地図を示すことで、来訪者だけでなく地域住民自身も自らの位置や地域のつながりを認識できるのではないか。

2． 清水豪九（角磐山 大山寺 金剛院 看坊）

人間の身体が何によって成り立っているのかを考えることから話を始めたい。人は食べ物や水など、自然から得られるものによって生きている。ここ山陰ではその食べ物や水の源をたどると、大山に降る雨や雪そして大山に行き着く。大山に降った水は山に染み込み、森に蓄えられ、ブナ林を通ってミネラルを含みながら川となり、里を潤し、最終的には海へと流れ海洋生物を育んでいく。この「山・里・海」をつなぐ水の循環こそが、この地域の生命を支えている仕組みである。

この地域では古くから、その恵みを「大山さんのおかげ」という言葉で表現してきた。これは単なる自然の恵みへの感謝ではなく、人間が自然の循環の一部として生きているという認識を示す言葉だ。仏教には「身土不二（しんどふに）」という教えがある。これは、人の身体とその人が生きる土地は切り離せない存在であるという考え方である。大

山寺の本尊である大智明権現という地蔵菩薩も、本来は「クシティガルバ」という名前を持ち、「大地」と「子宮」を意味する言葉から生まれた存在である。つまり命の源を表すを育む場所を守る存在であり、大山の自然そのものを象徴しているともいえる。

1300 年前に大山寺が開かれたことを表す書物には、山頂の池に地蔵菩薩が現れたという一節がある。これは、当時の人々が水の源である山頂の池に命の源を見出し、それを仏の姿で守ろうとした結果、大山寺が成立したことを示していると考えられる。

毎年、大山寺周辺は冬になると 2 メートルを超える雪が積もる厳しい環境である。しかしその雪は、夏の間にゆっくりと溶けながら森を潤し、地下水となって数十年、あるいは百年の時間をかけて湧き水や温泉となって現れる。自然の現象の一つ一つが、目に見えないような土の中の小さな命、そして人間の生活や未来の世代につながっている。

仏教には「日日是好日（にちにちこれこうにち）」という言葉がある。どんな日もかけがえのない一日であるという意味である。自然の循環の中で生きていることを実感すると、厳しい環境で感じる事象、雨粒一つや落ち葉一枚も意味のあるものとして感じられる。「大山さんのおかげ」とは“恵み”といった良い面だけではなく、こうした厳しい自然環境も含まれている。自然と共に生きる上で避けては通れない自然の理、それらに抗うわけではなく静かに受け入れる言葉でもある。

国立公園制度は自然を守る重要な仕組みだが、守るべきものは景観だけではない。人々の自然との関わり方、自然に対する畏敬の心、人が何に対して手を合わせるのかという精神文化こそが、未来へ受け継ぐべき価値である。

３． 長尾純（株式会社さんべ開発公社　企画営業部長・さんべツアーズ事業部長）

島根県大田市三瓶町で観光体験プログラムを提供する「さんべツアーズ」の取り組みについて紹介したい。三瓶山は年間約 60 万人が訪れる自然豊かな地域であるが、地元に住む人々にとっては当たり前の風景になっている側面もある。その日常の自然を「特別な体験」に変えることを目標に活動している。

代表的なプログラムの一つが「天空の朝ごはん」である。夜明け前に観光リフトで山頂付近まで上がり、日の出を眺めながら朝食を楽しむというイベントで、10 年以上続く人気企画となっている。食事には地元のパン屋や飲食店、農林大学校などが協力しており、地域の食材を活かした朝食を提供している。

また、夜間にリフトを運行して星空観察を行う「天空の星降るリフト」も人気を集めている。三瓶山は「夜空の暗さ日本一」に認定された地域であり、山頂から見る星空は非常に美しい。星空ガイドによる解説とともに天体観測を楽しめるイベントとして、多くのリピーターを生んでいる。

さらに、電動アシスト自転車を使ったサイクリングツアーや、地元農家と連携したワサビ体験ツアーなど、地域資源を活かした多様な体験プログラムを展開している。ワサビ体験では、わさび田の見学や収穫体験、採れたてのワサビを使った食事体験などを行い、自然と食文化を同時に楽しめる内容となっている。

こうした取り組みの本質は「人と人をつなぐこと」にある。これまで地域の事業者は個別に活動することが多かったが、観光体験を通じて互いに協力することで新しい魅力を生み出すことができるようになった。

今後は、自然体験だけでなく、石見神楽の練習見学ツアーなど地域文化に触れる企画も展開し、観光客と地域の人々の交流を深めていきたい。また、観光を通じて自然を利用するだけでなく、保全活動にも参加してもらう仕組みづくりを進めていきたい。

４． 立花寛奈（（一社）隠岐ジオパーク推進機構 生物研究員）

隠岐ユネスコ世界ジオパークの取り組みについて紹介したい。ジオパークは、自然を保護する制度である国立公園とは異なり、地域が主体となって地域遺産の価値を守りながら活用していく仕組みである。保全・教育・観光といった活動を通じて地域の利益を生み、その利益を再び保全へと還元していく「循環型」の考え方が隠岐ジオパークの目指すところである。

神奈川県出身で、植物研究をきっかけに隠岐を訪れ、現在は隠岐ジオパーク推進機構の生物研究員として活動している。研究対象となったのはミズナラという樹木である。本州では標高の高い冷涼な場所に生育する樹種だが、隠岐では海岸近くの低標高地から生育しており、この独特の植生が研究のきっかけとなった。隠岐の自然環境の魅力に惹かれ、約 5 年前に移住し活動を続けている。

隠岐の自然の魅力は植生だけではない。火山活動の痕跡を残す地形や断崖、巨岩や巨木に対する信仰、古くからの神社や祠など、自然と文化が一体となった景観が現在も残っている。こうした自然・地形・文化のつながりを総合的に理解できる点が、隠岐ジオパークの大きな特徴である。

自身の役割は、隠岐の植物や生態系の価値を整理し、その価値を地域住民と共有することである。現在は大きく二つの取り組みを進めている。一つは、ジオパークの重要地点を守るための「保全活用計画」の策定である。隠岐ジオパークには 109 カ所のジオパークサイトがあり、それぞれの場所について地域住民や関係機関と協議を行いながら、どのように守り、どのように活用していくかを検討している。現地での意見交換や会議を重ねながら計画づくりを進めている。

もう一つは、地域住民にジオパークの価値を伝える活動である。研究者による研究成果の発表会を開催するほか、自然観察会や講座などを通じて、島民に地域の自然の魅力を伝える取り組みを行っている。また、NHK 松江放送局の番組でジオパークの魅力を紹介するなど、情報発信にも取り組んでいる。

こうした活動の中で感じている課題は、「自然の価値を地域の人々と共有することの難しさ」である。日常的に豊かな自然の中で生活していると、その価値が当たり前のものとして意識されにくい。自然保全の重要性を理解してもらうためには、丁寧な対話を重ね、共通の理解を築くことが必要だと感じている。

また、自然を守ることは単に理念を掲げるだけでは実現できないとも指摘する。多くの場合、自然を守るかどうかは人間の判断によって決まる。だからこそ、自然への畏敬の念や大切に思う気持ちを持つ人を増やしていくことが重要である。現代社会では自然との距離が広がりつつあるが、ジオパークの活動を通じて自然の大切さを実感する機会をつくりたい。

５．コメントとディスカッション ―地域をつなぐ視点

千布拓生氏コメント

清水氏の話については、仏教的な世界観と地域文化の結びつきが印象的であり、大山の信仰文化を蒜山地域の文化とも重ね合わせながら興味深く聞いた。また、長尾氏の観光の取り組みについては、蒜山でも参考にしたい先進的な事例であると感じた。立花氏の研究と普及活動についても、自身が植物研究者として活動してきた経験から共通点を感じており、地域の自然価値を伝える活動の重要性を改めて認識した。

蔵本所長コメント

登壇者の発表から共通して浮かび上がるキーワードとして「つながり」を挙げたい。人と人、自然と人、文化と歴史、地域と地域、さらには地域と世界を結びつけることが国立公園の重要な役割である。また、国際的な生物多様性保全の取り組みと地域の活動をつなげることが、自身の役割であると感じた。

大山隠岐国立公園ではこれまで約 10 年間「国立公園満喫プロジェクト」により施設整備や景観改善、プロモーションなどが進められてきた。今後も 2030 年に向けた新たな計画が進められる予定であり、地域の人々と連携しながら国立公園の価値を高めていきたい。

６．今後の課題

ディスカッションでは、各登壇者から共通する課題として「人材不足」と「地域住民の意識」が挙げられた。

清水氏：大山寺では将来的に僧侶が自分一人になる可能性もあり、人手不足が深刻な課題である。また、自然保護は一つの地域だけで取り組むのではなく、大山隠岐国立公園全体のつながりの中で考える必要がある。

立花氏：地域住民の中には自然の価値を十分に実感していない人も多く、保全の必要性を理解してもらうことが課題である。特に日常生活の中で自然の恩恵を感じにくくなっていることが、その背景にあると感じている。

長尾氏：地域の人々が自分たちの地域の価値に気づいていない場合が多い。観光イベントを通じて地域の魅力を再発見する機会をつくることが、地域の誇りを育てることにつながる。

千布氏：自然の価値を理解してもらうためには、その自然が地域の産業や観光を支えていることを伝えることが重要である。蒜山では自然景観や農産物が観光の大きな魅力となっており、自然保全は地域経済とも深く結びついている。

７．まとめ

石村氏：大山隠岐地域は神話や歴史、自然環境が重なり合う、日本の成り立ちにも関わる重要な地域である。こうした地域の魅力は、探究すればするほど新しい発見がある。教育現場では現在、単に知識を学ぶだけでなく、自らテーマを深く探究する学習が重視されている。地域の大人たちも同様に、この地域の自然や文化を探究し、その魅力を語れるようになることが重要である。大山隠岐国立公園は、自然・文化・歴史が重なり合う広い地域である。地域ごとの取り組みをつなぎながら、それぞれの地域が自らの物語を発信していくことが、100 周年に向けた地域づくりにつながる。

5．2部 意見交換会

＜開催趣旨＞

・次の10年に向けて関係者で連携して国立公園を盛り上げていくためのキックオフ。

・ここで出た意見や提案は、満喫プロジェクトの地域協議会の場で紹介するなどして、今後の具体的な動きにつなげていく。

＜内容＞

・出席者より、今後10年間を見据えた大山隠岐国立公園における取組及び連携等に係る提案が行われた。

・第一部の登壇者も交えて意見交換を行った。

＜意見交換の概要＞

・満喫プロジェクト地域開催の目的をはっきりさせるとともに、具体的な動きを生み出さなければ協議会の意義が理解されづらく、出席につながらない。

・関係自治体の市町村長レベルで議論を行い、横の交流と新しい動きを生み出せないか。

・ハードの整備は進んできたが、ソフトの部分でより一層の努力が必要ではないか。地域関係者が国立公園についてストーリーを語れるようにすべではないか。

・周辺自治体も含めて国立公園を盛り上げていく動きに積極的に関わるよう、働きかけていくべきではないか。

・地域関係者が関係省庁の支援メニュー等情報を把握できていないものがあった。関係者への情報共有をより一層図る必要がある。

＜プログラム＞

①主催者挨拶、趣旨説明（環境省）

②今後10年を見据えた取組及び提案

・サントリーホールディングス：三枝直樹　専任シニアスペシャリスト

・中国運輸局観光部：津森篤　専門官

・鳥取県生活環境部自然共生社会局：後藤田卓也　局長

・島根県環境生活部自然環境課：角森裕子　課長

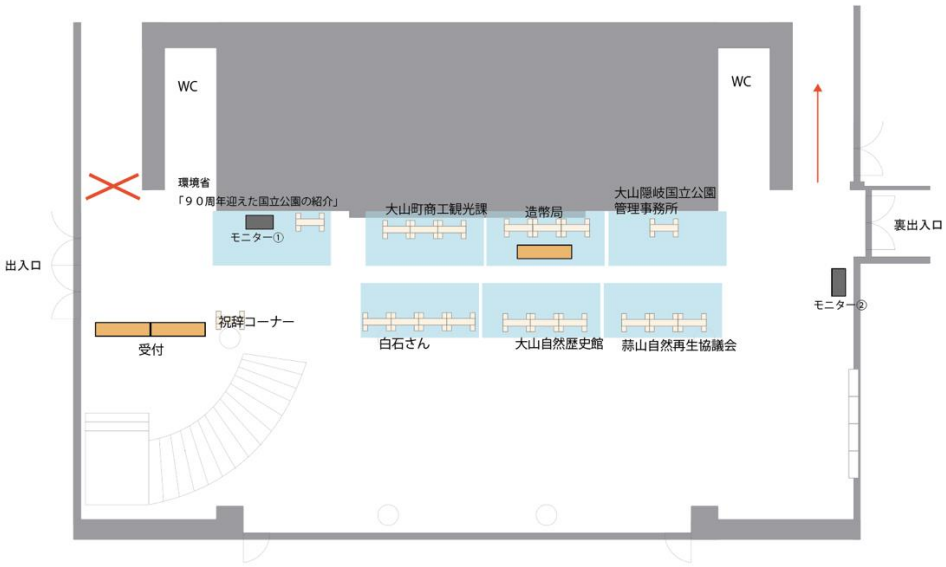
・岡山県環境文化部自然環境課：劔持政己　課長

　＋三県合同の取組

・大山町：竹口大紀　町長

③参加者意見交換

６．展示パネル



①蒜山自然再生協議会

蒜山自然再生協議会の活動の紹介。草原を未来に残すため私たちができること。パネル展示

②大山町商工観光課

日本遺産　大山の紹介。日本遺産「地蔵信仰がはぐくんだ日本最大の大山牛馬市」をはじめとする展示物、パンフレット配布。

③独立行政法人 造幣局

国立公園制度 100 周年記念貨幣発行のお知らせ。大山隠岐発行硬貨のイメージ図の展示、販売方法チラシの配布。

④大山いきもの部 白石泰志氏

大山隠岐エリアにおける新種発見の展示パネル

「大山隠岐で見つかった新種生物」

「大山と隠岐で見つかった陸生ウズムシ」

「大山の名前が初めて付いたきのこ　ダイセンニカワブドウタケ」

「隠岐近海で見つかった オキトゲカワ」

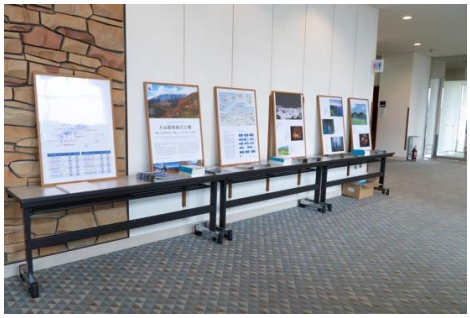
「近年隠岐で見つかった新種昆虫」

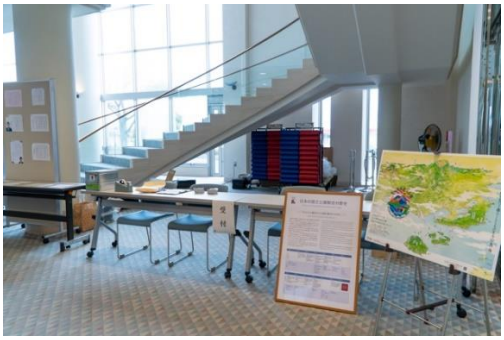
⑤鳥取県立大山自然歴史館

企画展「ダイセン」と名の付く植物パネル展示

⑥環境省

日本の国立公園制度の歴史等パネル展示、９０周年を迎えた国立公園についての展示、リーフレット配布。





7．報道記事

・日本海新聞、山陰中央新報、中海テレビ、大山町ケーブルテレビより取材あり。

・日本海新聞の記事：紙面掲載・オンライン記事

8.参加者数

＜当日会場参加者数＞

・第一部：112 名（登壇者、サイドイベント関係者、環境省関係者含まず）

・第二部：45 名

＜当日オンライン参加者数＞

23 名

＜事前申込者数（第一部・二部合算）＞

・会場参加：109 名

・オンライン：44 名

以上。

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へ
リサイクルできます。